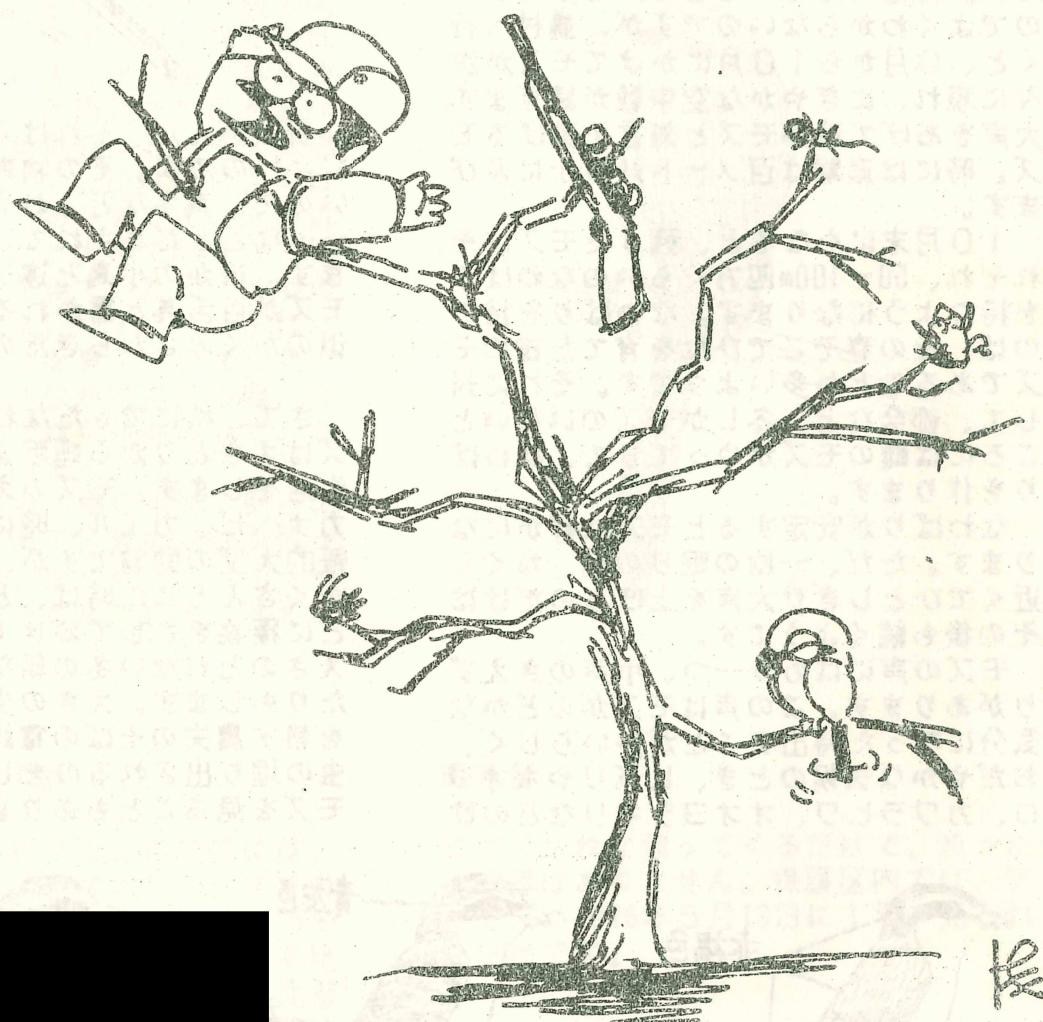


すずがも通信

# すずがも通信 34

行徳野鳥観察会友の会会報

1985.10



「今年のモズは10味ちかうぞ！」

## 特集

## モズの一年

稻穂が黄金に色づく初秋、木の梢からジョーン・ジョーン・ジョーン。キーキー・キーキー、キチキチキチキと大きな声が聞こえ始める。モズの鳴き声です。行徳ではそれほどモズは多くないのでよくわからないのですが、勝村へ行くと、9月から10月にかけてモズが次々に現れ、にぎやかな空中戦が続きます。大声をあげて違うモズと競争で逃げるモズ。時には追撃は百メートル以上に及びます。

10月末にもなると、残ったモズはそれぞれ、50~100m四方くらいのなわばりを持つようになります。なわばりを持つのは、その暮そこでひなを育てた雌のモズであることが多いようです。それに対して、都会など、冬しかモズのいないところには雌のモズがやってきて、なわばりを作ります。

なわばりが安定するとモズは静かになります。ただ、一回の眠りの前、ねぐら近くでひとしきり大声を上げるのだけはその後も続くようです。

モズの声にはもう一つ、小声のさえずりがあります。この声はモズがのどかな気分になった時出すことが多いらしく、おだやかな気候のとき、ヒバリやホオジロ、カワラヒワ、オオヨシキリなどの歌



折り込んだ、それはすばらしい歌です。その物真似があまりないので、真冬など、おや、もうヒバリが……などとだまされてしまふこともあります。ほかの小鳥と違つるのは、この物真似のたくみさからきたのでしょうか。

さて、秋にできたなわばりの中で、モズはえさとりから睡眠まで、いっさいの生活をします。モズのえさは大型の虫や力ナヘビ、力エル、時には小鳥など、比較的大型の動物ですが、こうしたえさがたくさんとれた時は、とげや有刺鉄線などに獲物をさしておき(はやにえといふ)えさのとれない冬の朝などにそれを食べたりもします。えさの少ない冬には、畑を耕す農夫のそばの電線などの上から、虫の塊り出されるのをじっと待っているモズを見ることもあります。



アカモズ(雄)



チゴモズ(雄)

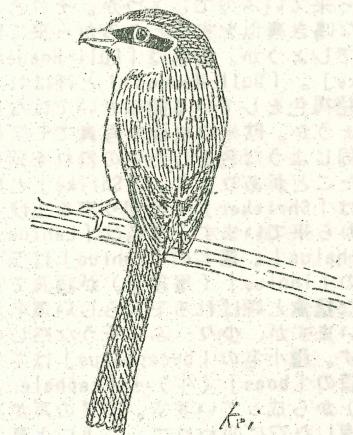


モズ(雄)

関東の平地では、2月になると、雌がなわばりを解いて、雄のなわばりに侵入して来ます。雌は雄のそばで、ちょうどひなが親に甘えるようにジュージューと鳴き、誰は虫をくわえてきて雌に渡します。それがモズの結婚の儀式です。電線に並んだ2羽のモズ。雄のモズが小声で雌にさえずりかけているのを見るのもこのころです。2月末~4月、モズは垣根などの樹枝上に木の皮、プラスチック、しばしば脱脂綿、ちり紙などを使い、深い皿型の巣を作り、白地に茶色の斑の入った4~5羽の卵を産みます。卵を抱くのは雌で、雄は虫をくわえて雌に与えます。けれどもひなには巣立つと、モズは急いでひながてひなには巣立つと、モズは急ににぎやかになります。ひなのが甘え声は一日中絶えることはありません。人が近づくと親はキチキチと大声で鳴き立てます。私が昔、モズを見ていた頃、4羽の巣立ちひなは数日後2羽ずつに分かれ、雄と雌が別々にひなを育てていました。

そして1ヶ月、ひなが独立する頃、なわばりは消え、モズは平地からいざこへ姿を隠してしまいます。

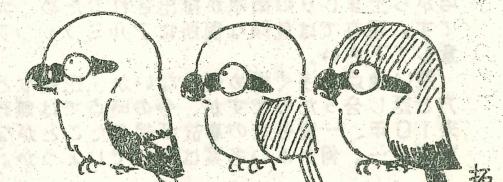
この現象は、関東以南の平野で同様におきています。行徳では夏も少数が残っているようですが、多くのモズは山へ移動するのではないかと思われています。



モズ

## 編集部

にごくまれに渡ってくるだけで、めったに記録はありません。保護区内では、アカモズが1976年5月13日に1羽、見られただけです。



モズ

「下総の秋や董より折れはしむ」梅沢和記男。保護区の董も黄金色に変わり、ススキやオギの穂が夕日に映え、銀のさざ波のようです。保護区の周辺ではモズが電線やニセアカシアの上で、秋から冬の間の繩張りの宣言をしています。モズ、漢字では「百舌」。「百」の「舌」と書くのはあの「キチキチキチ」という鳴き声から来ているのでしょうか。それとも模々な鳴き真似をするところから来ているのでしょうか。英名は「Bull-Headed Shrike」。「Bull-Headed」と呼ばれるのは橙褐色をしている頭のせいではないでしょうか。欧米の映画や写真でモズの頭と同じような色をした牛の群れを何度も見たことがあります。「Shrike」というのは「Shrieker」(金切り声を上げる者)から来ています。学名は「Lanius bucephalus」。属名の「Lanius」はラテン語の「lanius」(屠殺者)が語源です。小さな猛禽と呼ばれるモズらしい属名だと思いますが、少々、ふつとうな感じもします。種小名の「bucephalus」はギリシャ語の「boas」(牛) + 「kephale」(頭)から成っています。モズの声が高さを増した空に吸われて、いよいよ暮の秋です。

## あつ、危ないよ！

7月31日(水)、水路沿いにある江戸川下水処理場の排水口付近(観察舎前より300mほど下流の地点)で小学4年生が溺れかけるという恐ろしい事故がおきました。幸い、すぐ近くにいた大人がどうぞで救助したので、大事には至りませんでしたが、一歩間違えば死亡事故になるところです。観察舎前の水路、丸浜バードリバーは深いときでも、上流の方が50cm、昨年しんせつした下流の方が1m位の深さしかない安全な川です。ただ、処理場の排水口付近だけは処理場から土まじりの雨水が排出されるため、大人の背たけよりも深く掘ってあるのです。現在では危険な箇所にアルミフェンスがとりつけてありますが、充分に注意して下さい。

深い地点を浅く埋め戻せないか、蛇籠などをおけないか、安全策を葛南土木の方と話し合ったのですが、今の時点では無理とのことでした。観察舎では開館以来10年、一度も水の事故が起きたことがなく、安心して来れる場所だったので……。何かよい名案はないでしょうか。

初嵐、野分、雁渡し、秋に吹く風の呼び方は様々です。昨年の9月、台風がいくつか去って、青空が高さを増した頃、一人でふらっと妙典へ行った時、秋の衣装に着替えたノビタキに出会いました。南へ渡る直前だったのでしょうか。丸太の杭にかけた網につかまって風に吹かれていきました。ノビタキ、漢字では「野鶴」、ヒタキというのは地鳴きが火打ち石を打つ音に似ていて、こう呼ばれます。英名は「Stonechat」。「stone」(小石) + 「chetterer」(おしゃべり屋)から成っています。やはり、鳴き声が二つの小石を一緒に打ち合わせんなのでこう呼ばれるそうです。学名は「Saxicola torquata」。属名の「Saxicola」はラテン語で「岩にすむもの」という意味です。種小名の「torquata」はラテン語の「torquee」(首飾り)が語源です。ノビタキの雄の夏羽は頭が黒く、襟の両側に白い部分があるのでこう呼ばれるのでしょうか。ノビタキ等の夏鳥が去って、秋本番、間もなくスズガモも数を増します。夏に行われた高圧線の設置がどう影響しますか……。

## 事務局

第4回東京湾講座が8月4日に開かれた。今回は夏休み特別企画として午前中は自然観察会が行われ、午後から行徳公民館で映画と講演の兼いが開かれた。

観察会では潮干狩りをしながら、力二・ゴ力イ・シオフキなど干潟の生物を観察。映画と講演の兼いでは「ある日の干潟で」という、観前のどのか干潟の風景をしのばせる映画を観賞し、干潟の生物について風呂田・田久保尚講師の講演を聞いた。

参加して最も印象深かったのは、参加の方々からの「東京湾の思いの外、豊かな自然に接し感激した。」という声の多かったことだ。特に、自然観察会に参加された方々は「身近な東京湾に力二やゴ力イなどこんなにたくさんのがいるなんて少しも知らなかった。」とむしろ驚いた様子だった。

外海から船で入ってくると、東京湾に入るや水が茶色く濁り、油っぽくなるのがありありとわかる。東京湾の汚れば昔から取り沙汰にされることが多く、案外東京湾というと「死の海で自然は残っていない」と思っている人が多いのではないかだろうか。

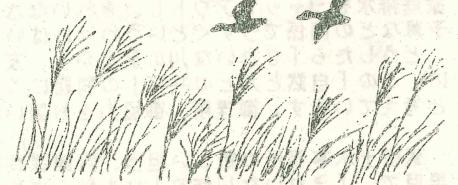
しかし、東京湾はまだ死んでいない虫の息ではあるが、自然が息づいている大切な場所だ。何もないように見える土色の干潟でも、望遠鏡で見ると何百といる力二がダンスを踊っている。鳥、魚、虫……東京湾を大切な生活の場としている生物はまだまだたくさんいる。

今、東京湾横断道が建設されれば、東京湾は、また、手痛いダメージをこうむることになる。「自然や生態系に与える影響は少ない」わけがない。片方では残り少ない自然が次々と破壊され、片方では「自然を取り戻そう」と人工干潟が更大な金をかけて作られる。この矛盾がいつまで続くのだろう。

ここ、行徳保護区は東京周辺で自然が意識的に残された貴重な場所だ。しかし、もうただ残しておくだけでは意味がないと思う。来年で10周年を迎えるが、10年の間に、周辺はもちろん、保護区内の自然環境は大きく変化した。特に乾燥化が進んでいることは見逃せない。董がセイタカアワダチソウなどとあって栽培されている。ヨシゴイなど湿地で繁殖する鳥が激減している。眞水を引くること、池を掘るなり、何らかの改良を加えることが必要だろう。

住宅地の中に、昔ながらの自然をいつまでも保存していくかどうか。「自然と人との共生」の道を探る意味でも、この場所を大切にしていきたいものだ。

## 五七



## 編集部よりのお願い

## 10周年記念特集号にあなたの声を

行徳野鳥観察舎も来年で開館10周年を迎えます。そこで、友の会では10周年記念イベントの一つとして、61年1月に「10周年記念特集号」を発行することになりました。これから野鳥観察舎、行徳保護区に期待することや「新浜への思いなどテーマは何でも結構ですから、「あなたの声」を観察舎までお寄せ下さい。締め切りは11月15日、楽しい特集号を作りましょう。編集などをお手伝いいただける方もどうぞ観察舎まで。毎月第2日曜、3時頃から図書室で編集会議を開いています。4時からの運営会議にもお気軽に御参加を。

## 丸浜バード・リバーを清流に

観察舎前の水路、丸浜バード・リバーの今年度分のしゅんせつ工事については、葛南土木事務所の担当課長が代わられたこともあり、8月末に文書で工事計画などについてお伺いしていましたが、9月9日に葛南土木事務所の河端課長と八木橋主任が観察舎にお見えになり、説明をして下さいました。要点は次の通りです。

工事時期：昭和60年10月下旬頃——12月下旬  
(正確な日付けは決まり次第、連絡)

工事範囲：昨年のしゅんせつ済みの地点より30—50m間隔をおいて  
上流へ200m位

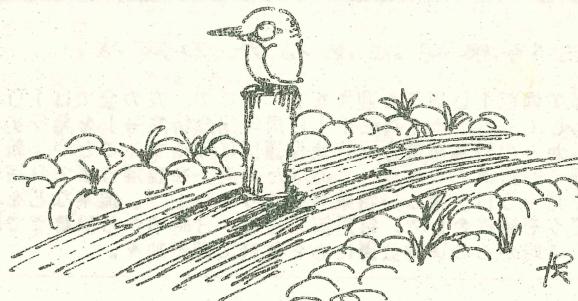
工事規模：昨年度と同じ。但し、水深については更に50cm深く掘り  
砂で埋め戻す

今年度の工事も昨年度の工事と同様、「海域浄化と野鳥との共存」に重点を置いて進めてくださることでした。昨年度の工事範囲よりも間隔をおくのは、砂を入れた場合の効果を入れない場合と比較するためだそうです。砂を入れる件については、友の会から昨年も要望をしていました。浄化が促進されるはずですので、よい結果ができることが望れます。工事期間についても、当初3年だった計画をもう少し伸ばして、ゆっくりと工事を進める予定だそうです。「海域浄化」は国庫事業のため、国から予算ができるそうでこれもうれしいことです。ただ残念なことに、今年の工事は工期が遅すぎ、カモの飛来に影響がでるのではないかと気がかりなのですが……。

観察舎周辺にお住まいの方の中には奥気に頭を悩ませている方がいらっしゃるかもしれません。しかし、その原因是そこにしゅんせつされていない川があるからではなく、その自然の川に汚い家庭排水が流れこんでいるからなのです。この家庭排水をシャットアウトし、きれいな水を流せればそれが一番よいのですが、予算などの関係で今すぐというわけにはいきません。(資料編参照)

どうしたら「きれいな川に戻るか」、友の会は県や市、地域住民の方々と一緒に、この「自然と人の共存」の問題にこれからも積極的に取り組んでいきたいと考えています。御理解、御協力をお願い致します。

葛南土木事務所の新しい担当、河端課長は北海道出身。体のがっかりとした快男児で、「きれいな川作り」にも熱心に取り組んで下さいます。友の会からの意見にも真剣に耳を傾けて下さいますので、これからもいろいろと連絡をとりあっていきたいと思います。  
(文責 東 麗子)



## 鳥の国から 一観察舎便り

蓮尾純子

秋の渡り、まさにだけなわ。昨夜来所したキビタキ若鳥を朝放鳥したところに車にぶつかって目をまわしたメボソムシクイガ入院(元気がよく、即放鳥)。鴨場の中ではサンコウチョウが見られ、ハイイロチュウヒも初認。9月15日、敬老の日のことです。

カモもふえてきましたよ。コガモの初認は8月21日、1羽、オナガガモは9月4日、2羽、ヒドリガモ9月7日(?)1羽、シマアジ9月8日、1羽、ヨガモ9月5日、2羽、ハシビロカモは8月20日、1羽。マガモは7月ごろから1羽が見られているので、渡來したものなのかどうかよくわかりません。まだ大きな群れは見られませんが、小編隊が空を横切る姿はいかにも秋らしい風情です。

悲報いくつか。9月7日、セイタカシギの若鳥が立てなくなって保護されました。2日ほどで死亡。9月15日、フクロウの「ロクちゃん」の死体を鴨場内で発見。研究室から巣立って以来13ヶ月、完全自立から3ヶ月。よく太っていましたが、死因は心臓・肝臓破裂。衝突によるものらしく、心房内に大出血がありました。

## アラスカ便り

松木 譲

お元気ですか。僕はまだ元気です。極北野生生物保護区に来て早くも3週間目で、だいぶここでの生活にも慣れてきました。手紙に書きたいことがそれこそ山ほどあるのですが思いついたことから少しづつ書いていくことにします。

5月23日から1週間、本隊より一足早くカクトヴィクに行つて、キャンプの準備(ヘリコプターを使って食料、テント等をキャンプ予定地に運ぶ)を手伝いました。ツンドラはまだ雪におおわれていて(30—50cm)最初にブルックス。レンジを越えて空から見た時はまだ冬そのものという感じでしたが、すでにヒメムナグロ、ツメナガホオジロなどはしきりにディスプレイしていました。初めの5

日間は朝から晩まで動きづめでしたが、最後の2日間はだいぶひまもできて、セスナを使ってのラジオ・トラッキング(注:動物に小型の発信機をとりつけて行動を追跡する調査)につれていってもらい、アラスカヒグマ(15頭ぐらい)とオオカミ(2頭)を空から見ました。このラジオ・トラッキングはすごくおもしろくて、来年はこのボランティアをやろうかなあと考えています。



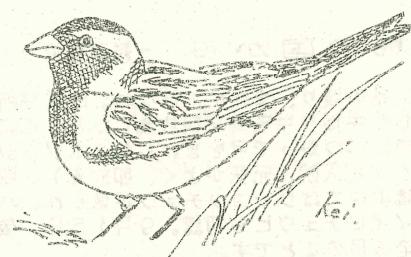
## すずがも通信

ちなみに、僕の参加したツンドラ・バード・プロジェクトは今夏の極北野生生物保護区での最大のイベントで、ツンドラに7つのキャンプ（3人が4つと4人が3つ）、8つの研究地域を置くもので、24名が参加しています。それぞれのキャンプは、大学院生かフリーの生物学者による有給のリーダー1名と、2~3名のボランティア（大学生とフリーのバードウォッチャー）からなっています。ボランティアはアメリカ全土から集まってきた熱狂的なバーダー（標識調査者）か、アラスカで一夏過ごしたいというアトドア志向の人達ばかりです。アメリカでは今、漁労野生生物局のようないい野生生物学者の職に空きがなく、本当に野生生物学者になろうと思ったら、学位をとった後しばらくは、臨時の生物学校師として働きながら、わずかしかしないチャンスを待つより他には手がないようです。もっとも日本ではこういう職業自体が存在しないわけですから、それに比べたらずっといいことはいいのですが……。

さて、5月30日に24人＋ラス。オーツ氏はブルックス。レンジの北のはずれにあるビーター湖に行って、2日間そこでオリエンテーションをしました。ビーター湖はすごくいいところで、ハシグロビタキ、パライロマシコ、ヒメウズラシギ、メリケンキアシシギ、オオモズ等を見ました。



-8-



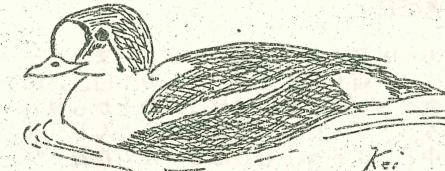
ツメナガホオジロ

僕は7つのキャンプのうちで一番トヴィクに近いオクピラク・キャンプにいます。リーダーのジョン・モートンはウィスコンシン大学で野生生物生態学を勉強して、今はバージニア政治工科大学の院生で、アメリカガモの研究をしています。他のメンバーはウィスコンシン大学のポール・オビンクと、フロリダ州立大学で哲学教授をしているボブ・ロフティンという熱狂的バーダー、それに鳥のセンサス（数を調べること）です。ランドサットによる環境のタイプ分類をもとにして、ツンドラを100kmくらいの環境にわけて、環境ごとの鳥の利用度を調べています。それぞれの環境に200m×500mの調査区を3つ作り、週1度、6月の第1週から8月の第2週まで毎週センサスします。それぞれのキャンプに15~18の調査区があります、1日3区ずつ5日か6日かけて一巡することになっています。

ビラクには○水辺のツンドラ、○温原、○温原と湿った草原の混交、○湿った草原のツンドラ、という環境があります。その他に週2日、ヘリコプターを使って、そこをクッククックという調査地帯に行つて、そこで○茂みの多いツンドラ、○川岸、○温原のセンサスをします。

最後に見た鳥・獣のリスト……クズリ、アラスカヒグマ、カリブー、北極ギツネ、オオカミ（等々70種ほどのリストが書いてあったのですが、公表不可があるので……あと、日本名におきかえるのが大変なので……省略しました：編集部）

6月1日



ケワタガモ

お久しぶりです。お元気ですか。

長いこと手紙をもらっていないませんが、観察舎の常連たちは皆元気でやっていること思います。僕の方はどうぞ元気です。

4日前に無事ツンドラ・バード・プロジェクトの調査を終えてオクピラク・キャンプからカクトヴィク入りしました。カクトヴィクではこの夏参加した他の23人の人たちと打ち上げパーティーをしました。

今日、続きを調査をあと2週間するためにジャゴ・デルタ。キャンプに移動しました。担当のラス・オーツ氏は海岸にあるジャゴ・デルタ。キャンプと内陸に部のニグアナク。キャンプを撤収しないで、あと2週間、8月の下旬までセンサスを続けて、シギ、チドリ、ガンカモ類の渡りの調査をすることに決心した様です。ジャゴ・デルタ。キャンプには僕の他にジョン・ライダー（オレインから来た熱心なバンダラー）、ドワス・ブラダック（コロラド州・ボルダー出身、僕の娘さんの住んでる町です）とロブ・クンド（バーモント州立大学生）がいます。ジャゴ・デルタ。キャンプはジャゴ川河口の干潟の近くにあって、渡りを見るにはもってこいの場所です。

話は少し前にもどりますが……7月28日~8月3日に一週間休みがあつて、僕はジョン・ライダー、ロブ・セクンドとテリー・マクスウェル（テキサスの小さな大学で生物学の教授をしているバンダラー）と一緒に、カクトヴィクから120マイル西にあるブラウンロー・プラットという所にバンディングに行きました。手元にあったカスミ網はメッシュ（網目）

が大きすぎて、コオリガモの雄雌をとつただけに終わりました。しかし、ブラウンロー・プラットで一週間に12,000羽をこす雄のオオケワタガモとケワタガモの渡りを見ました。北極海の流水の間をぬうように飛ぶケワタガモの群れを、毎日たっぷりと楽しみました。その他3マイルほど離れた所にあるクビワカモメのコロニーを見に行ったりもしました。

7月下旬に初めて太陽が極冠をおおう氷の大陸の向こう側にしづむのを見ました。だいたい同じころから夜の気温が0°C前後まで下がるようになります（一番暖かい時でも夜は5~10°Cでしたが……）きれいな花もつぎつぎと枯れていって、ツンドラでの短い夏は終わっていました。先週末には本格的な雪が降りました。先週末には本格的な雪が降りましたが、今は冬がすぐ近くまで来ているといった感じです。

僕は9月4日ごろにフェアバンクスに帰る予定です。皆様によろしく伝えてください。

8月20日

9月4日に雪のあるカクトヴィクをあとにして、フェアバンクスに帰ってきました。フェアバンクスのまわりはまだまだ緑が多く、夏中枯草色のツンドラを見ていたので、何ともいえずすがすがしい気がします。9月5日に一日中キャンバスをかけずりまわって、課目登録を何とか終わらせました。

今日から（9月6日、金曜日）からついに授業が始まりました。頭の中はまだツンドラでの思い出でいっぱいなので、今は必死になって気分の切りかえを心がけているところです。

9月6日



譲

すずがも通信

## サシバのしばちゃん

サシバの「しばちゃん」が旅立ちました。東隅郡から連れてこられたのが6月15日、窓からとび立ち、初めて外の世界にでたのが7月15日。以来2ヶ月近く、夜はどこで寝ているのがどうしてもわかりませんでしたが、毎朝10時か11時ごろには必ず戻ってきて、窓からばさっと飛びこむと、ピー・ピーと甘え声で餌をねだります。そのうちにセミや大きなバッタ、カマキリなどを持ってきては、足やはねをばらばらにむじって食べるようになりました。餌をせがむ回数も減り、夕方近くまで戻ってこない日もありました。一度など、あと少しで放鳥するはずだったヒバリがから飛び出して、窓わくにとまつたとたんにしばちゃんがとびつき、ひとつつかみ。すぐに取り返したものの、ヒバリは三時間後に死亡。手痛い犠牲です。

9月2日(月)の休館日、いつになくしばちゃんが甘えました。新館で片付けをしていると、窓のすぐ外でピイピイ鳴きたて、窓を一つ一つ調べたあげく、あいた窓を見付けて入ってきてしましました。旧館の研究室に戻ると、いきなりさ

蓮尾純子

あっと飛んできて頭にとまり、またピイピイ。餌を与えて、ほんの1口、2口食べるだけ。庭にでれば木の上から見おろしてピイピイ。この日はほとんど一日中どこに行ってもしばちゃんの視線を感じる始末。餌がほしいというより、かまってもらいたいという様子で、もしかして涙の前兆かなと冗談まじりに言っていました。

9月7日の夜、NHKで「サシバの瀧り」が放映されました。広大な海原の上をゆうゆうと旋回しながら上昇して行くサシバたち。しばちゃんにもこんなことができるのかな、と思っていた矢先、8日からしばちゃんは姿を消しました。その日の観察会で、北池上空を舞うサシバが写されたとのことですが、これがしばちゃんの別れの姿だったのかも知れません。今ごろはもう伊良湖岬を越えているのでしょうか。宮古島や台湾ではくせいにされないよう、長旅の無事を祈っています。

## 行事案内

誰でも自由に参加できます。無料。

## ☆定例新浜深鳥会(毎月第2日曜日) 10月13日、11月10日

集合： 東西線行徳駅前 午前10時

解散： 行徳野鳥観察舎 午後 2時半頃

担当： 草 良一、田久保晴孝

特物： 登食、飲物、バス代(大人190円、子供 100円)

冬鳥が少しずつやってきます。ジョウビタキやツグミの姿を探しましょう。妙典で野鳥を観察し、江戸川放水路土手で昼食。午後はバスで観察舎へ向かいます。歩きやすい服装・はきもので。

☆定例園内観察会(毎月第1、3日曜日) 10月6日、21日  
11月3日、17日

集合： 行徳野鳥観察舎前 午後1時半

解散： " 午後4時頃

担当： 観察舎 蓼尾、協賛 友の会

北で繁殖を終えたカモ達が帰ってきました。保護区内にもぎやかになります。歩きやすい服装・はきものでおいでください。

## ☆ヨタ力がいるかもしない会 10月10日(木・祝)

集合： 行徳野鳥観察舎前 午後5時

解散： " 午後7時

担当： 観察舎 蓼尾

秋も真盛り。マツムシやカンタンが秋の詩をうたっています。運がよければヨタ力に出会えるかも……。

## ☆釣り糸・ビニール回収大作戦第2弾 10月27日(日)

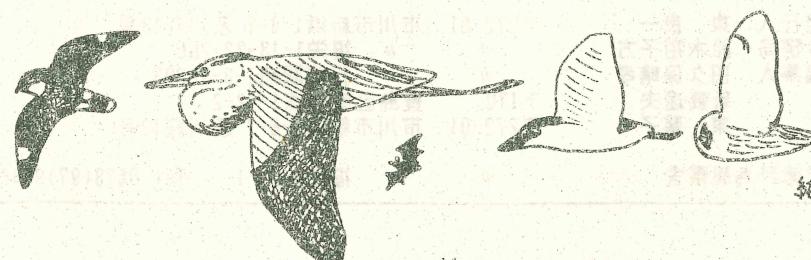
集合： 東西線行徳駅前 午前10時

解散： 行徳野鳥観察舎 午後 1時半頃

担当： 荒井俊光( )

特物： 登食、飲物、マフ、タオル、バス代

4月に行なった回収大作戦の第2弾。塩浜堤防を歩いて釣り糸やビニールを拾います。歩きやすく、汚れてもよい服装で。



すずがも通信

☆平日探鳥会

11月12日(火)



12

集合： 行徳野鳥観察舎 午前10時

解散： リー 午後 1時頃

担当： 鈴木( [REDACTED] )、東( [REDACTED] )

共催： 共同保育サークル「ペンギンクラブ」

保護区の中を幼児のペースでのんびりと歩いてみませんか。小さなお子様連れの方でも安心しておでかけ下さい。昼食持参。

☆ねぐら観察会

11月24日(日)

集合： 行徳野鳥観察舎前 午後4時半

解散： リー 午後6時頃

担当： 観察舎 遠尾

日もすっかり短くなりました。風が冷たさを増す夕暮れ時、ネグラへ帰る鳥達を観察しましょう。寒くないように上着をしっかりと。

事務局より

会費の納入をお忘れなく。一般会員 1000円、賛助会員 2000円以上、ジュニア会員(小中学生) 500円。観察舎で預かってもらいます。

郵便振替は仙台 2-6129 行徳野鳥観察舎友の会 まで。

編集後記

行徳 取前でもモズの声がきかれますようになりました。夜はカンタンもなさいます。

今年は、ハゼが不漁とのことで、例年に比べると江戸川放水路のハゼづりの人 beaucoup少なく、シギ・チドリがよくみられています。人と鳥の共存を考えていましょう(はよたか)

新妻さんはあいにく出張中。出張先からの第一声は「忙しいよオーニー。」ではないでしょうか。すずがも通信は、タイプ打ちから印刷まですべて会員の手作り。大変ですが、それなりに楽しいことも多いものです。(馨)

すずがも通信

No. 34

1985年10月1日発行

発行人 東 良一

事務局 鈴木裕子方

編集人 田久保晴孝

新妻途夫

東 鑑子

行徳野鳥観察舎

〃 〃 福栄4-22-1 Tel 0473(97)9046